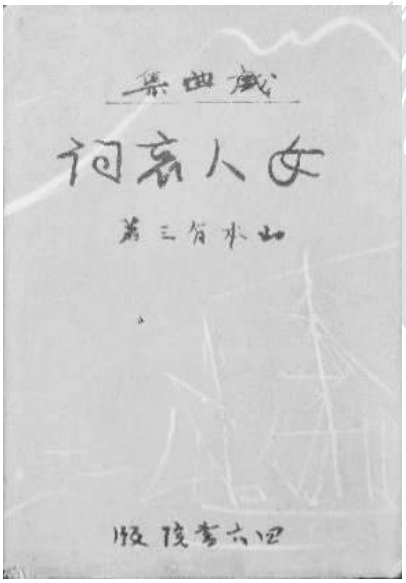
三鷹市山本有三記念館館報

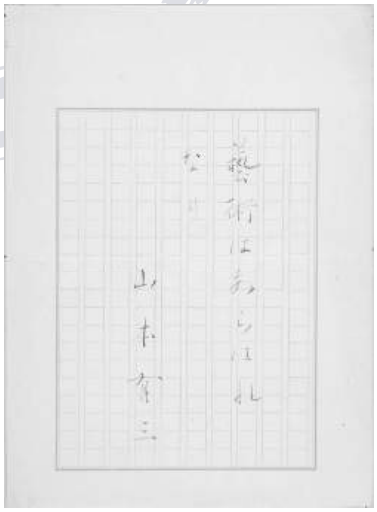
Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第 30 号
2026年4月



『女人哀詞』
四六書房 昭和6年2月

『風』
朝日新聞社 昭和7年11月



書「芸術はあらはれなり」

目次

新企画展紹介
「戯曲から小説へ―越境する有三文学を読む―」……2
コラム
「芸術は「あらわれ」なり」他の展示室のご紹介 ……3
【寄稿】瀬戸口郁（俳優）
「山本有三文学の魅力」 …4・5
事業報告、新刊のご案内 …6・7
記念館スケジュール ……8

企画展について

戯曲から小説へ
―越境する有三文学を読む―

山本有三[1887－1974]は、戯曲と小説の両分野にわたって作品を発表した作家です。明治末期から大正にかけては主に劇作家として、大正末期から昭和にかけては主に小説家として活動しました。昭和に入ってからの有三について、ときに小説家へと完全な転身を遂げたかのように言われることがありますが、必ずしもそうとは言い切れません。劇作家としての有三は、昭和5(1930)年に発表した「女人哀詞」から10年以上の間、新作の戯曲を発表しませんでしたが、昭和18年には、代表作として名高い「米百俵」を発表しています。また、同時期、発表にこそ至らなかったものの、幕末を舞台にした戯曲を構想していたという関係者の証言も残っています。小説家へ転身したというよりも、様々な事情によって劇作から遠ざかったというほうが正確でしょう。

そもそも劇作家として活躍していた頃、有三には小説を書く気はなく、劇作に終始するつもりであったといいます。しかし、当時の文壇において、劇作家の収入は小説家よりも不安定なものでした。有三のように戯曲が何作も上演されている劇作家であっても、ときに一銭の収入もない月があったほどでした。こうした経済事情に加えて、大正14(1925)年、有三は、息子の進学先を考えて引っ越しと家の新築を決めたことから、まとまった資金を必要としていました。折しも、朝日新聞社では菊池寛の「第二の接吻」に続く連載を手掛ける作家を探しているところでした。菊池からの推薦を受け、学芸部長の土岐善麿(ときぜんまろ)が有三に依頼を持ちかけたことで、有三は、「東京大阪朝日新聞」へ小説を連載することを決めます。大正15年、初の長編小説となる「生きとし生けるもの」を執筆し、以降も、「波」(昭和3年)、「風」(昭和5～6年)、「女の一生」(昭和7～8年)と同紙に連載を重ねることで、小説家としての地位を確立させていきました。

小説を書くにあたり、有三は、劇作を通してつちかった手腕をいかんなく発揮しています。限られた登場人物たちの間に対立関係を巧みに設定し、劇作家ならではの隙のない台詞運びや緊密な構成により、起伏に富んだ筋立てを展開させることで読者の心を掴んでいきました。

◆・◆・◆

長編小説の執筆を開始した前後の大正末期から昭和初期にかけて、有三は小説と並行して戯曲も発表しています。「父親」(大正14年)、「西郷と大久保」(昭和2年)、「盲目の弟」(昭和4年)、「女人哀詞」(昭和5年)など、劇作家としての確かな力量を感じさせる珠玉の作品ばかりですが、興味深いことに、この時期の戯曲には劇作の定石を外れたものが見受けられます。

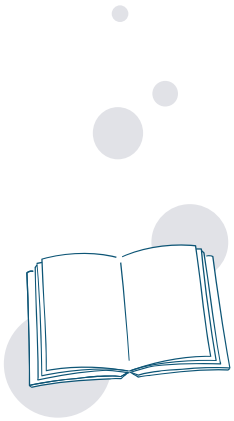
劇的な起伏や対立構造を設けずに、娘が嫁いだ後の老人の心理を穏やかに描いた「父親」や、通常、長い年月にわたる複雑な内容を描くのに適さないとされる戯曲で、「唐人お吉」の落魄(らくはく)の後半生を描いた「女人哀詞」等、戯曲でありながらも小説的な手法と発想によって書かれた作品があります。

その一方で、同時期には、小説「風」のなかに過去の戯曲作品「女中の病気」のエッセンスを取り込んだり、海外作家の短編小説を翻案し、戯曲「盲目の弟」として発表するなど、まるで戯曲と小説の境界を越えていくかのような作品を執筆しています。

昭和6年以降は、作家業以外の公的な仕事に関わるようになった忙しさからか、小説と戯曲を並行して執筆することはなくなりましたが、有三はその後も分野にとらわれることなく作品を書き続け、劇作家として、そして小説家として、多くの読者を獲得していきました。

このたびの企画展では、戯曲と小説を並行して発表していた大正末期から昭和初期の作品に着目し、文学上の形式や枠組みにとらわれず、己の目指す芸術を追求し続けた有三と、その作品についてご紹介します。

(文芸企画員・学芸員　三浦穂高)



コラム　「芸術は「あらわれ」なり」

山本有三が大正10(1921)年に執筆した随筆に「芸術は「あらわれ」なり」があります。この随筆のなかで、有三は、「題材そのものに、戯曲的題材だとか、小説的題材だとか、そんなきまったものはないはずだ」と述べています。

芸術は題材によって左右されるものではなく、作家がその題材をどのように生かしていくかが肝要であり、それを「戯曲的に」生かすのか、「小説的に」生かすのかは、作家自身の「にらみ」が決定するのだと記されています。この芸術論からは、たとえ小説に比べて制約の多い戯曲という形式であっても、題材に左右されず芸術作品を描き得るという、劇作家としての矜持が感じられます。

書「芸術はあらはれなり」
自身の芸術観を表す座右の銘として
したためたものと推測される。

2階展示室E・Fの紹介

展示室E

「子どもたちに本を」との想いから〈ミタカ少国民文庫〉を開設し、子どもたちの読書環境の充実に尽力した山本有三。昭和31(1956)年に「青少年の育成に役立ててほしい」と三鷹の邸宅を土地とともに東京都へ寄贈し、旧有三邸は、長らく図書施設「有三青少年文庫」として近隣の子どもたちに愛されてきました。その想いを受け継ぎ、記念館では、2階の展示室Eに、自由に手に取って読むことが出来る絵本や児童書を設置しています。窓際には、青少年文庫時代に使用されていた椅子や、作り付けのベンチがあり、腰を掛けてゆっくり本を読むことができます。

学校の帰り道やお休みの日などに、記念館に立ち寄って思い思いの本を手に取り、読書にふける時間を過ごしてはいかがでしょうか。

展示室F　いいものを少し―山本有三ゆかりの品々―

三鷹市山本有三記念館が所蔵する資料の多くは、建物が東京都から三鷹市へと移管された昭和60(1985)年に遺族から寄贈されたものです。また、平成8(1996)年に記念館として開館した後も、折に触れて遺族や関係者から資料の寄贈を受け、現在に至るまで、数々の展示会を彩ってきました。

2階の展示室Fでは、主に有三が愛用したゆかりの品々を展示しています。展示資料は企画展ごとに入れ替えており、有三が実際に着用した衣服や眼鏡、湯呑や煙管(きせる)などがご覧になれます。「いいものを少し」という言葉を大切にし、華美ではなくとも上質なものを好んだ有三の人柄がしのばれる品々ばかりです。ぜひご覧ください。

山本有三文学の魅力

瀬戸口 郁（俳優・劇作家）

わたしは演劇人である。人生のおよそ四十年近くを稽古場と劇場というきわめて特殊な空間で生きてきた。俳優とはどんな仕事かと訊かれればわたしは即座に「肉体労働」と答える。もちろん戯曲を正確に読み解く知的作業も必要だが、それが生きるのも思うように動く肉体があってこそだ。次にちょっと考え「せりふを正確に身体化すること」と答える。これが簡単に見えてなかなか容易ならず、いまだ悪戦苦闘中の身だが、俳優の肉体はこれまで演じてきた劇作家の文体で出来上がっているのではないか、というのが舞台人としての実感である。

さて、わたしが所属する文学座は１９３７（昭和１２）年、岸田國士（くにお）、久保田万太郎、岩田豊雄という三人の文学者を幹事として創立された。「真の意味における精神の娯楽を舞台を通じて知的大衆に提供する」というのが三幹事による劇団の創立宣言だが、創立時に山本有三は長谷川如是閑、鏑木清方、菊池寛らとともに文学座支持会発起人として名を連ねている。山本有三の戯曲は文学座でも上演しており、太地喜和子の生涯最後の舞台となった「唐人お吉ものがたり」―女人哀詞―（山本有三／作　戌井市郎／補訂・演出）はわたしが駆け出しのころに観た忘れがたい舞台のひとつである。

そんなご縁もあってか、三鷹市山本有三記念館からの依頼で山本有三作品の朗読会を開催したのが２００４年のこと。以来、今日に至るまでおよそ二十年にわたりこの会を続けてきた。わたしにとって年に一度訪れるこの時間はいまやライフワークとなった感もあるが、今回あらためて強調したいのは、山本有三はもとをただせばわたしと同じ演劇人、劇作家として自らの作家人生をスタートした人物だということである。

そもそも彼はどこで演劇と出会ったのか。「山本有三作家の自伝」（日本図書センター）の年譜によると、幼少期に芝居好きの母に連れられて故郷の栃木に開設された明治座に芝居見物をするようになったとある。山本有三と芝居との関わりの発端部ともいえるエピソードだが、以下、彼が演劇の世界にたどり着くまでの出来事を年譜から記してみると――

- 十五歳　高等小学校卒業。八年間を首席で通すも、東京浅草の呉服店に丁稚奉公に出される。
- 十六歳　川上音二郎一座の翻案劇「オセロ」を観劇する。
- 「オセロ」観劇の一月後、奉公先を飛び出し実家に戻り、学問をしたいと両親に懇願する。しかし叶わず家業を手伝うことに。この間、歌を詠み「万朝報」に投稿、入選する。
- 二十歳　第六高等学校に合格するも父が急死。入学をとりやめ家業につく。
- 二十二歳　第一高等学校文科に入学。同級に近衛文麿、土屋文明、豊島与志雄。
- 二十三歳　ドイツ語の試験に落第。新学年の同級生として芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、松岡譲らと出会う。
- 二十四歳　足尾銅山争議に材を取った処女戯曲「穴」が東京俳優学校試演劇場により上演される。

とまあ、ざっとこんな流れだが、ここまでで挫折と希望、出会いと別れ、厳しい現実の壁と捨てられぬ夢……悲喜こもごもの人生模様が交錯する一本の芝居「山本有三青春物語」が出来そうな人生航路である。

以後、二十五歳で帝大独文科に入学し卒業論文は「ゲルハルト・ハウプトマンの戯曲「織匠」の形式について」を書きあげ、帝大卒業後は秋月桂太郎、川上貞奴、喜多村緑朗らの新派三角同盟の座付作者、舞台監督（演出）を務めるなど、若かりしころの山本有三は演劇に熱くのめりこんでいく。やがて「生命の冠」を井上正夫一座が上演、「坂崎出羽守」を六代目尾上菊五郎が初演するなど有三は新進劇作家としての地位を確立してゆく。年譜だけ見るとその歩みは順風満帆かととれなくもないが、彼の歩んだ芝居の世界は決して平坦な道のりではなかった。有三が戯曲を書いていた大正時代は急速に近代化していくこの国で、新しい時代の演劇はどのような表現を目指すべきか、歌舞伎も新派も新劇も試行錯誤の時代で、西欧演劇の導入も相俟って混沌とした状況にあった。後年、駆け出しのころを振り返った有三の文章が残っている。

「戯曲は雑誌に掲載されることが困難であったばかりでなく、上演されるというようなことは、さらにさらに困難なことであった。いや、困難というよりは、むしろ絶望に近いものだった。学校を出たばかりの若い連中の書いたものなんか、小むずかしい理屈を並べたものか、

夢のような気分劇なんだから、あんな脚本は舞台にはかけられない。あからさまにそう言わないまでも、これが劇場当事者の真意だった。そんなわけで、われわれの戯曲は、文壇劇壇両方面から、締め出しをくった形であった。しかし私にしてみれば、いくら戯曲を書いても、活字にすることも、脚光をあびることもできないのだから、ずいぶんしゃくにさわった。もうこうなれば、すっぱり劇作をやめてしまうか、背水の陣をしいて、本気に腰をすえるよりほかはなかった。そして私は後者を選んだ。よし、それなら、おれたちの戯曲だって、決してただ書生っぽの理屈劇だけではないというものを見せてやるぞ。板にかけられても、少しは見ごたえのあるもの、活字に組まれても、多少は読まれるようなもの、そういったものを書いてみせるぞ。」（「嬰児ごころし」漫談」より）

有三の反骨精神、負けてたまるかという闘争心が伝わってくる。また大正十年に久米正雄の戯曲集のあとがきに書いた文章では「筋を書いた戯曲はある。気分を書いた戯曲はある。思想を書いた戯曲はある。しかし人間を人間らしく書いた戯曲はほとんどないような気がする」と書き、近代劇の代表的な作家イプセンを批判し、人間を書いているという点では当今ほとんど敬服する作家はいないと言い切り、わずかにチェーホフとストリンドベリィのある作にそれを見ることができるのみ、と断じている。また大正十三年には、向う二年間は翻訳劇だけをやると宣言した築地小劇場の小山内薫に対して「築地小劇場の反省を促す」という檄文を叩きつけるなど、劇作家時代の山本有三は熱血漢で曲がったことが大嫌いで、始終頭の上から怒りの湯気が立っているという印象を受ける。これだけ他者とぶつかり己の理想の旗を高く掲げると、ともすれば眼高手低となり、いざ執筆となった途端に己の筆が鈍るというブーメランが返ってきそうなものだ。しかし、そうした陥穽に落ちることなく、劇作家山本有三は幅広い観客に訴える舞台を作り続けたのである。

そんな風に劇界にどっぷり身を投じていた山本有三が初めて小説に挑戦したのは朝日新聞の連載小説「生きとし生けるもの」、大正十五（１９２６）年、三十九歳のときのことだった。この間の小説家への転身事情については紙面の都合で端折るが、菊池寛のすすめと手引きによる仕事だったとは本人の弁である。

さて、ここで冒頭に触れた山本有三記念館での朗読会に話を移す。わたしがこれまで取り組んだ有三作品は「生きとし生けるもの」「波」「真実一路」「路傍の石」「ふしゃくしんみょう」「女の一生」……と、実はすべて小説作品である。山本有三記念館から朗読の場を提供していただきながら、わたしがあえて戯曲ではなく小説作品の朗読に取り組んだのには理由がある。彼の小説には劇作家として獲得した「言葉の流儀」と「方法論」が横溢しており、それこそが小説家山本有三の特異性と思えるのだ。「戯曲の形式で主要なものは徹頭徹尾せりふであり、血の通った人間を描くことに尽きる」というのが彼の持論だが、小説の登場人物のせりふのうまさ、物語の構成力、地の文のリズミカルな運びや場面の凝縮力の高さ、これらはすべて劇場空間で観客にせりふを「聞かせること」、つまり観客の「耳」を意識して言葉を紡いできた山本有三の身体性から生まれたものではないか。ならばこれを声に出して読んでみたらどうなるか、というのがわたしの朗読会のテーマなのである。何本も朗読してみて思うことだが、「路傍の石」の次野先生のせりふも「女の一生」の允子のせりふも、わたしが大好きな「ふしゃくしんみょう」の柳生又右衛門のせりふも、彼の小説ではここぞというときに放たれる登場人物のせりふは見事なほど板の上のせりふ、舞台のせりふになっている。劇作家はせりふを決して頭で書いてはならない。俳優の肉体に書くのだ。せりふに大切なものはリズム、音、呼吸……執筆のさい劇作家が念頭に置くべきことは山ほどあるが、とりわけ肝心なのは俳優の体重がしっかりと乗るせりふを書かなければならないということだ。ここに毛筋ほどのずれがあっても劇場空間では通用しないのである。山本有三はそうしたせりふの勘どころを憎いほど心得た書き方を小説においても展開している。これこそが彼の武器で、こんなものを書ける小説家は稀有だと思う。

彼は劇場で鍛え抜かれた言葉の強さを信じていた。山本有三は終生、劇作家としての肉体を失わなかった作家なのである。

瀬戸口　郁（せとぐち　かおる）

俳優・劇作家（文学座所属）
慶應義塾大学文学部卒業。
俳優として「女の一生」「寒花」「逃げろ！芥川」など文学座の舞台を中心に活躍。また劇作家として数多くの戯曲を執筆、上演。脚本作品「てけれっつのぱ」（劇団文化座）が平成20年度文化庁芸術祭大賞を受賞。東京藝術大学客員教授。

令和７年度　事業報告

展 示 事 業

出張展示「作家・山本有三が暮らした家―三鷹市山本有三記念館の魅力」

【会　期】8月23日（土）～9月21日（日）
【会　場】三鷹市芸術文化センター地下１階 第２美術展示室

三鷹市山本有三記念館は、令和7年5月12日（月）～令和8年4月24日（金）まで、施設の改修工事に伴い長期休館しました。休館中には、三鷹市芸術文化センターにて、作家の山本有三が暮らした家であり、大正時代の趣を残す希少な建築物として、三鷹市の有形文化財に指定されている記念館の魅力を紹介する出張展示を開催しました。代表作「路傍の石」等の複製原稿や初版本、映画のポスターのほか、建物の来歴を解説したパネルなどを展示しました。アンケートでは、「記念館とは違う展示方法が新鮮でわかりやすい」、「改修後の再開館が楽しみ」などのコメントが寄せられました。

教 育 普 及 事 業

【出　演】おはなしあずきの会
【日　時】第69回：4月12日(土) 第70回：5月10日(土) 午後2時～2時30分
【会　場】三鷹市山本有三記念館１階 展示室Ｂ
【参加者】第69回：子ども３人、付き添い保護者３人
　　第70回：子ども８人、付き添い保護者８人

毎月第２土曜日（７・８月を除く）に開催している「おはなし会」では、ボランティアグループ「おはなしあずきの会」の方々が、季節に合わせた絵本や手遊び、絵人形を使ったパネルシアターなどで、参加する子どもたちにおはなしの楽しさを伝えています。第70回を迎えた５月のおはなし会には、長期休館前ということもあり、多くの子どもたちが集まりました。そのなかには、これまでに20回以上参加している常連のお子さんの姿も。終始、和やかな雰囲気で、子どもたちの笑顔があふれる楽しい会となりました。

第23回 アフタヌーン・ミニコンサート

【出　演】みたかジュニア・オーケストラ有志
【日　時】４月20日（日）
【会　場】三鷹市山本有三記念館１階 展示室Ａ
【参加者】33人

大正時代末期の洋館の雰囲気を味わいながら、様々な楽器の演奏を楽しむ「アフタヌーン・ミニコンサート」。第23回目は、「みたかジュニア・オーケストラ」有志の皆さんによる素晴らしい演奏で、ヴァイオリンやヴィオラ、オーボエなどの音色が、やわらかな光のなかで響きわたり、メンデルスゾーンやドヴォルザーク、フィアラやハイドンといったクラシック音楽に酔いしれる贅沢なひと時となりました。

第16回 春の朗読コンサート

【出　演】野田香苗（朗読）、中村華子（笙）
【日　時】5月9日（金）・10日（土）午後6時～7時30分
【会　場】三鷹市山本有三記念館1階 展示室A
【参加者】9日：31人 10日：34人

朗読家の野田香苗さんと様々な演奏家が共演して、有三作品の朗読と楽器演奏のコラボレーションをお届けしている春の朗読コンサート。長期休館の直前の開催となった第16回目のコンサートでは、笙奏者・中村華子さんとの共演で、有三の随筆「芸術は「あらわれ」なり」(抜粋)や、絶筆「老いの春」(抜粋) などを朗読していただきました。アンケートでは、「野田さんの声と笙の音がよく合っていて美しかった。」、「朗読と演奏が厳かでとても素敵なプログラムだった。」などのコメントが寄せられました。

＜夏休み子どもワークショップ＞「文選」おしごと体験 「活字」を組み合わせて「ドット文字」をつくってみよう

【日　時】7月26日（土）午後1時～3時
【会　場】三鷹市芸術文化センター地下1階 第5創作室
【参加者】小学生9人、付き添い保護者7人

三鷹市芸術文化センターの創作室で、山本有三の小説「路傍の石」の主人公、吾一が印刷工場で働いた際に経験した「文選」の作業を体験する夏休み子どもワークショップを開催しました。当時、主流だった活版印刷の仕組みを学びながら、文字が彫られた「活字」を拾って栞（しおり）やコースターに好きな文字や言葉を印字するという内容に、参加者全員が熱中して取り組みました。アンケートでは、「とても楽しく、うれしい思い出ができた。」、「活版印刷の難しさ、楽しさを知れた。」などのコメントが寄せられました。

ガイドボランティア活動

記念館は長期休館中でしたが、年に4回の連絡会議のほか、6月には馬込文士村及び大田区立龍子記念館への見学会、令和8年2月には、慶應義塾大学教授・粂川麻里生（くめかわ）氏をお招きして山本有三の戯作とゲーテ、及びドイツ演劇との関係についての研修会を実施しました。さらに、令和7年度の活動としては、8月～9月の出張展示におけるガイドのほか、来る再開館に向けて更なる知識向上のための勉強会を10月～12月にかけて計3回行いました。

見学会の様子

勉強会の様子

新刊のご案内

企画展「戯曲から小説へ―越境する有三文学を読む―」開催に合わせ、三鷹市山本有三記念館文庫の第6弾、『風』を刊行しました。「風」(昭和5～6年) は、山本有三にはめずらしい推理小説風の筋立ての作品です。書店等では入手できませんので、ぜひこの機会にお買い求めください。

価格　800円(税込)
販売場所　三鷹市山本有三記念館受付・公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団通販ストア

令和８年度（4月－9月）三鷹市山本有三記念館の催しものスケジュール（予定）

4月	25日（土）～9月6日（日）	企画展「戯曲から小説へ―越境する有三文学を読む―」
5月	9日（土）	第71回おはなし会
	15日（金）・16日（土）	第17回春の朗読コンサート
6月	13日（土）	第72回おはなし会
7月	12日（日）	第24回アフタヌーン・ミニコンサート
	25日（土）・26日（日）	子ども向け解説 「山本有三ってどんなひと？―洋館を探検しながら、山本有三を知ろう―」
8月	2日（日）	夏休み子どもワークショップ 「筆文字で旧字に挑戦！オリジナルうちわを作ってみよう！」
	22日（土）	夏のこわ～いおはなし会
	23日（日）	第25回アフタヌーン・ミニコンサート
9月	7日（月）～11日（金）	展示替えに伴う臨時休館
	12日（土）	第73回おはなし会
	12日（土）～2027年3月7日（日）	企画展「建物の記録と記憶―100年の時を経て―」（仮）

※記載されている事業及び日程は予定のため、変更となる可能性があります。

三鷹市山本有三記念館年間パスポート

三鷹市山本有三記念館では、発行日から１年間、何度でも入館できる「年間パスポート」を受付にて販売しています。年に２回の企画展に加え、子ども向けの「おはなし会」や「アフタヌーン・ミニコンサート」など、様々なイベントにご活用いただけます。

【価　　格】1,000円（税込）
【有効期限】発行日から１年間
【購入場所】記念館１階受付

※ご購入者のみ有効です。他人に譲渡または貸与することはできません。

土・日・祝日の午後１時から４時まで解説を行っています。事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。

編集・発行
三鷹市山本有三記念館
〒181-0013　東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL:0422-42-6233
URL:https://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/
過去の館報を公開しています。　𝕏（旧 Twitter）@BungeiMitaka

開館時間：午前 9 時 30 分～午後 5 時
休 館 日：月曜日及び年末年始（12/29 ～ 1/4）
　　月曜日が休日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館
入 館 料：300 円（20 名以上の団体 200 円）　年間パスポート 1,000 円
　　●中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、「東京・ミュージアムぐるっとパス」利用者は無料
アクセス：JR 中央線「三鷹駅」南口より徒歩 12 分、
　　JR 中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口（公園口）より徒歩 20 分
　　三鷹駅南口よりみたかシティバス「むらさき橋」下車徒歩 2 分
　　吉祥寺駅南口より小田急バス「万助橋」下車徒歩 5 分